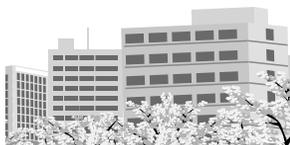


## 会員の広場



### 晩節を汚さず

安間 孝信（東京）

昨年二月末に、十五年乗った車が車検となるのをきっかけに車をやめた。池袋の悲惨な事故の加害者の様にならないためにはベストの選択をしたつもりだ。車をやめても私の住む横浜市では、市営地下鉄と市内を走るバスは一定額を支払えばあとは乗り放題の「敬老乗車証」なるものがある。近くに行くのには、アシスト自転車を購入した。横浜は坂が多い。これで対策は

充分だと思った。

九月のお彼岸の頃、近くのホームセンターに出かけた帰りに事故は起きた。坂道は下りで快調に自転車を下って車道から歩道に移ろうとしたわずか数センチの縁石でハンドルを取られ側に転倒した。一時間半位道路わきで気絶して居たようだが、親切な方が救急車を呼んでくれ、気が付いたのは救急車の中だった。幸いに家の近くの病院に受け入れてもらい、いつもお世話になっている整形外科の先生の診察を受けることができた。診断の結果は左の肋骨が三本折れたのと、頭部打撲で要観察。あばら骨が三本も折れていると、息をしただけでも痛い。くしゃみなどしようものなら気絶してしまうほど痛い。更に次の日事態は暗転、起きたとき、なんと焦点が定まらない。二重に見えるではないか。痛みをこらえ、二階の寝室から階段を降りるとき

は足元のステップがどれを踏んで良いのか分からず危なっかしい。窓から見える向かいの家は、ほけて横長に斜めに見えた。

それでも幸いだったのが、私には某大学医学部で脳外科の教授をやっていた高校の同級生がいる。精密に検査してもらったところ、頭骸骨内の骨折は無いので、「一時的に視神経が混乱しているからだろう、治るよ。」との診断であった。嬉しかった。

新型コロナウイルスのさなかで、ギブスをするのでなく、頭を開くでもないのが、自宅で安静にしていることになった。

事故から半年、肋骨もつながら二重に見えた眼も元通りに治った。嬉しい限りである。

以前、話題になった本で、和田秀樹医師の著書「八十歳の壁」を知り合いの人から頂いて読んだ。この本には、「高齢ドライバーはむしろ

安全。出来ることは放棄しなくて良い。」との記述がある。これを読んでいながら車をやめたのが果たして良かったのか。

本年二月二十四日、経済倶楽部で愛媛大学伊賀瀬教授の「認知症を予防するために〈ちよつと耳寄りな認知症予防のお話〉」と題した講演があり、著書『百歳まで生きるための習慣百選』を購入した。その中に「運動の苦手な人にオススメ、自転車に乗る」がある。

家内の友人が、「車をやめ、自転車に乗りかえて転倒というセオリーがあるんだよ。」と教えてくれたがその通りになってしまった。

確かに体がむき出しで乗っている自転車に比べて、車に乗っているのは安全だ。でも、車を運転して絶対加害者にならないということは無い。人に迷惑を掛けず「晩節を汚さず」に過ごすには痛い思いをしたが、これで良かったと思う。